

## 27年度版教科書つれづれ 3 「たんぽぽのちえ」(光村図書・小学2年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

「たんぽぽのちえ」は光村図書・小学校2年(上)の説明文である。この教材はかなり前から教科書に収録されている、光村図書の人気教材の一つとあってよい。23年度版と27年度版で、文章に変更はない。しかしながら、学習の手引きは大きく変わっている。手引きは、現場の先生方が授業の目安とするものであり、手引の変更は授業のあり方にも大きく関わってくる。

今回は、主として「たんぽぽのちえ」の手引きの変更について考えてみたい。

23年度版(以下旧版)では、「わかった ことや、考えた ことを まとめよう」とあり、次のように述べられている。

▼ たんぽぽは、どんな ときに、どんな ちえを はたらかせて いますか。それには、どんな わけが ありますか。ときを あらわす ことばや、かわって いく じゅんじょに 気をつけて、ノートに 書きぬきましょう。

「小学校学習指導要領解説(国語編)」の「説明的な文章の解釈に関する指導事項」にある「低学年では、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」を念頭においた手引きである。

その後に、1ページ半にわたって、大きな表が置かれている。表の一番上には「はじめ—中—おわり」と書かれている。つまり、この「たんぽぽのちえ」は、「はじめ—中—おわり」の三部構成に分かれると、手引きは指示している。表は、次のような構成だという。

はじめ …… 1段落 春に になると、たんぽぽの 黄色い きれいな 花が さきます。

中 …… 2段落～9段落

おわり …… 10段落 このように、たんぽぽは、いろいろな ちえを はたらかせて います。～

ところが、27年度版(以下新版)では、「じゅんじょに 気をつけて 読もう」とあり、

▼ たんぽぽは、どんな ときに、どんな ちえを はたらかせて いますか。ときを あらわす ことばや、かわって いく じゅんじょに 気をつけて 読みましょう。

と、ほぼ似たような指示がありながら、「はじめ—中—おわり」と書かれた表は無くなっている。

なぜ、「はじめ—中—おわり」の表が無くなったのか。それは、もともこの文章を「はじめ—中—おわり」の三部構成で読もうとすることに無理があったためである。

先に示した1段落「春に になると、たんぽぽの 黄色い きれいな 花が さきます。」は、話題提示の役割を果たしているようにみえる。確かにこの段落だけをみていると、「たんぽぽ」もしくは「たんぽぽの花」の話題を示しているようにもみえる。

しかし、2段落は次のようになっている。

二、三日 たつと、その 花は しぼんで、だんだん ぐろっぽい 色に かわって いきます。

1段落で花が咲き、その花が2段落で黒っぽい色に変わるのである。1段落と2段落は時間的な順序で書かれていることが分かる。そのような時間的な順序を見る限り、1段落だけを話題提示として2段落以降と分けて考えることには無理がある。

私は、23年度版が出た時にもこの文章を見ているのだが、教材文の方に目がいていて、学習の手引きを丁寧に見ていなかった。「はじめ—中—おわり」に分けた手引きを見逃していた。今回改めて見直してみて、現場の先生方がこの手引に困られた様子が想像された。授業をぼんやりと流してしまえば、「春になると」花が咲き、「二、三日 たつと」花は黒っぽくなり、じくは地面に倒れてしまうとまとめていける。1段落がなぜ「はじめ」なのかにこだわらなければよいのである。しかし、なぜ1段落が「はじめ」になるのかに、教師もそして子どもも目を向けてしまうと、その理由を上手く説明できないのである。

1年生で学習してきた「じどう車くらべ」や「どうぶつの赤ちゃん」の「はじめ」の書かれ方も違うし、1段落だけを分けて考える理由がつけられないのである。

おそらくそのような現場の声を受けて、見直しを行い、今回の改定になったのではないかと推察できる。新版の手引きには1段落から9段落までの内容をまとめる手がかりが次のように示されている。

- ① 春に になると
- ② 二、三日 たつと、
- ③ やがて、
- ④ この ころに になると、
- ⑤ よく 晴れて、風の ある 日には、
- ⑥ しめり気の 多い 日や、雨ふりの 日には、

教科書編集者が、1～9段落を時間の順序で読み取っていることが明らかにわかる書かれ方になっている。

なぜ、このような「誤読」が起こったのか。そのことについて、少し考えておこう。

光村図書は、23年度版の教科書で指導の系統性をかなり意識した編集をしたように私には思えた。「はじめ—中—おわり」は説明文の基本的な構成なのだが、光村図書の一年生の説明文教材では、「はじめ—中—おわり」の三部構成のものはない。二年生になり「はじめ—中—おわり」の構成を持つ説明文が登場してくる。また、話し方などにおいても「はじめ—中—おわり」は有効な捉え方であり、実際に教科書でも触れられている。そのような流れの中で、二年生の最初の説明文である「たんぽぽのちえ」を「はじめ—中—おわり」でとらえる「勇み足」をしたのではないだろうか。

では、「たんぽぽのちえ」をどのように読むのか。そのことにも触れておこう。一年生では「くちばし」「じどう車くらべ」「どうぶつの赤ちゃん」と子どもたちは説明文を学習してきている。そこで学んだことは、「問い—答え」の関係である。

「くちばし」では、次のようであった。

これは、なんの くちばしでしょう。

「じどう車くらべ」では、はじめに次のような問いが出されていた。

それぞれの じどう車は、どんな しごとを して いますか。  
その ために、どんな つくりになっ て いますか。

「どうぶつの赤ちゃん」では、次のような問いであった。

どうぶつ の 赤ちゃんは、うまれたばかりの生まれたばかりのいろいろなときは、どんな ようすを して いるのでしょうか。そして、どのように して、大きく なっ て いくのでしょうか。

はじめで問いを出し、それに答えていく。だから読み手は、問いをおさえて、その答えがどこに書かれているか、またどのように書かれているかを読み取ることが大事になる。

そのような学びをしてきた子どもたちである。ところが「たんぽぽのちえ」では、はじめに問いが出てこないのである。

「今までの文章には問いがあったのに、あれ、今度は問いがないぞ」、そう子どもたちが思ってくれるなら一年生の学習が生きている証拠である。

筆者がわからないから、問いを出すのではない。筆者が説明したいこと、読者にわかってほしいことがあるから、問いを出すのである。問いを出すことで、読者の目をそこに向けさせ、筆者の説明したいことに引き込んでいくのである。問いはレトリックである。問いは問題提示なのである。筆者が、読者にこれから何について説明するのか、何について話をするのかを示す役割を持っているのである。

もちろん一年生でそのことをきちんと理解することはむづかしい。しかし、問いの役割をちょっと意識できるようにしていくことが大切である。そうすると、「たんぽぽのちえ」では、問いがないことを意識できるし、問いに代わるものがどこかにないだろうかと考えることができる。

そうすると、ここではそれが題名であることが見えてくる。この文章は、筆者が「たんぽぽのちえ」について読者に説明しようとする文章なのだということが、子どもたちにわかってくる。題名が大事な役割を果たしていることが、改めて子どもたちに確認できるのである。

その上で、1～9段落を時間の順序に従って読み取っていけばよい。そして、この教材でもう一つ大事なことは、10段落が「このように」という言葉に示されるように、1～9段落をまとめる働きをしていることをつかむことである。

一年生の説明文では、「問い—答え」の関係を読み取ってきたが、「まとめ」の働きは出てこなかった。二年生になり、はじめて「このように」でまとめる働きをもつ文章が出てくるのである。「おわり」という言葉をここで教えるかどうかは別にして、文章の「まとめ」の役割を10段落がしていることをきちんと子どもたちには意識させていくことが重要となる。

最後に、旧版と新版を比較していて気になった教科書のレイアウト・書かれ方の問題について述べておきたい。

一つは、2段落のレイアウトである。2段落は次のようになっている。

①二、三日 たつと、その 花は しぼんで、だんだん くろっぽい 色に かわっ て いきます。②そうして、たんぽぽの 花の じくは、ぐったりと じめんに たおれて しまいます。

(\*①②は説明のために加藤が付したもの)

2つの文があるのだが、最初の文と後の文が、ページを変えて書かれているのである。これは新版旧版ともに変わっていない。一般的には、段落の途中で、ページが変わることはよくあることであ

る。しかし、二年生の最初の説明文で、分量もさほど多くない。現に1段落、3～10段落は、ページをまたがって書かれてはいない。明らかに意図的なレイアウトといえる。

1段落と2段落の①文までは、見開き2ページに書かれ、タンポポの花の咲いている大きな絵が配置されている。そしてページをめくったところに②文が書かれている。そのページの下には、じくが地面に倒れたたんぽぽの絵が載せられている。

たんぽぽが咲いているところから、じくが地面に倒れるところへの驚きをページを変えて演出したい意図はわかる。しかし、一つの段落をページをまたいで（それもページをめくった裏側に）載せることは、子どもたちにとって2段落の①文と②文が一つのまとまりであることを意識させるにくくする。段落意識とまでは言わなくても、文章のまとまりを意識させることを大事にすべきである。このレイアウトの仕方では、2段落の二つの文を別の段落（まとまり）と理解する子どもも多いはずである。

二つ目は、文節ごとにスペースを入れて表記していることに関わっての問題である。2年生のこの段階では、漢字も多用できないので、文節ごとにスペースを入れて、子どもたちが読みやすいようにしている。

私たちが書かれた文や文章を読む時、一字一字をたどって読んでいるのではない。あるまとまりを一度にとらえて読んでいるのである。ところが読めない子どもは、文字をまとまりでとらえられなくて、一文字一文字を目で追うようにして読んでいく。したがって読みはたどたどしいものになる。

文節ごとにスペースを入れることで、まずは文節のまとまりでしっかりとらえることができるようにしていくことが二年生では大事になる。繰り返しの音読が大事になる理由でもある。

さて、旧版の2段落②文3段落は、次のような行替えで書かれている。

そうして、たんぽぽの 花の じくは、  
ぐったりと じめんに たおれて しまい  
ます。

けれども、たんぽぽは、かれて しまっ  
たのでは ありません。花と じくを  
しずかに 休ませて、たねに、たくさんの  
えいようを おくって いるのです。こう  
して、たんぽぽは、たねを どんどん  
太らせるのです。

「しまいます」「しまったのでは」「こうして」と一つの文節が行をまたがって書かれている。これは子どもたちにとって、特に読むのが得意ではない子どもたちにとって、読みにくい書き方といえる。

同じような書かれ方が、5段落9段落10段落にも見られる。

新版ではどうか。3段落「しまったのでは」が「しまった」「のでは」と行が分かれて書かれているが6段落まではほぼそのような箇所がない。ところが7段落8段落9段落10段落には1～2箇所ずつそれが見られるのである。

細かい問題ではあるが、低学年の教科書であるだけに、繊細な配慮がほしいところである。